

終りのない闘い

道場に足を踏み入れたとき、一瞬、ヨハン・シュトラウスのワルツのメロディーにのって優雅に踊る舞台を思い出した。ところ狭しと乱取りをする人たちは、2人1組となって汗を流す。柔道とは、礼儀とバランス、そしてリズムを大切にスポーツである。100年以上も前に、嘉納治五郎という、一人の高い理想を掲げた男によって編み出された。そして今、ラスティ・カノコギは、その男の世界に入りこみ、女としての闘いの毎日を過ごしている。

クリストファー・タカギ

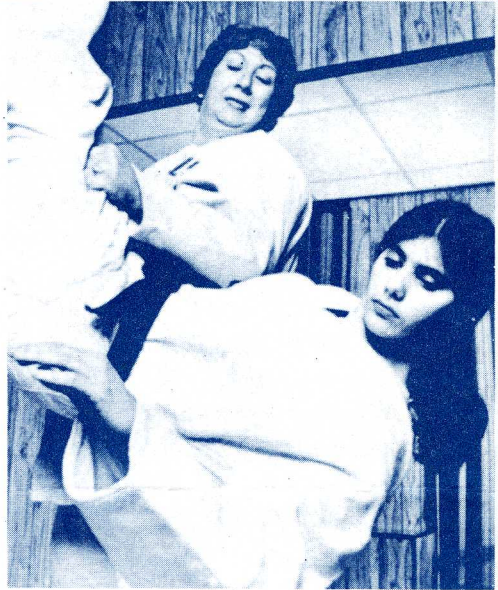
男子選手を相手に柔道の楽しさを学ぶ

1980年11月29日、30日。ニューヨーク・マジソンスクエアガーデンのフェルトフォーラム。27カ国、135人の女子選手が参加した、第1回世界女子柔道選手権が開かれた。開催国である米国の成績は銅メダル3個。オーストリア勢、フランス勢などの台頭が著しく、米国にとっては厳しい結果に終わった。とはいえ、ラスティ・カノコギにとっては、厳しくも嬉しい大会だった。

ラスティは1935年、米国は南ブルックリンに生まれた。少女時代はスポーツに熱中し、男の子にまじってハンドボールチームのレギュラーを目指すほどであった。そんな彼女も早くに結婚し、20歳までには子供を産み、家事に従事する毎日をおくるようになっていた。しかし、生来が活発なラスティは“余ったエネルギー”をもてあまし、柔道をはじめた。

柔道は20世紀のはじめ、講道館を創立した嘉納治五郎の弟子たちの手で、米国に紹介された。戦前、戦中の米国では、日本のものすべてを、東洋の神秘に覆われた邪悪なものとする風潮のもとで、柔道は禁止されていた。しかし、戦後、日本に駐留した米国兵が本国に柔道を好意的に紹介するようになってから、米国全土に広まっていたのである。1950年代には多くの柔道家が誕生していた。しかしそのほとんどは、やはり男であった。

ラスティはそんなことにこだわりはしなかった。身長173センチ、体重64キロの彼女は、男ばかり40人のクラスに加わった。友人の通っていたブルックリンのYMCAに入れてもらったのである。男ばかりの中でラスティは、女性であるがゆえの居心地の悪さを、何かにつけて感じた。たとえば、些細なことをあげる



と、トレーニングジムが女性立入禁止だったり、女子更衣室がなかったり——。しかし、彼女はその程度のことはあまり気にならなかった。男子選手を相手にする練習は厳しい。しかし、闘うことに楽しさを見出した彼女は、男子選手に劣らぬ実力をつけていった。

女性とわかってはく奪されたメダル

その当時、女子の試合はなかった。そこで彼女はYMCAのインタークラブ大会に出場、常勝者の1人になったのである。そして、1957年には遂に、AAU(全米体協)公認のYMCA選手権で優勝した。「君はまったく男みたいに戦うね」と賞賛してくれた同僚もいた。ところが、喜んだのも束の間、ラスティが女性だとわかると、AAUはメダルを取りあげてしまった。そればかりでなく、彼女は中傷さえされたのである。この“事件”があってからは、彼女はクラブ内の試合だけを楽しむようになった。

YMCAで柔道を教えるまでになっていたラスティは、その後、離婚。仕事もやめて日本に渡った。柔道の老家である講道館で修業するためだった。彼女は日本の男たちに混じって、1日9時間の練習に励んだ。そして帰国後、彼女の生活は柔道一色になった。講道館からニューヨークに柔道の指導に来ていた鹿子木量平氏との結婚を機に、柔道を教えることに全力を注ぎ、女子柔道のことも決して忘れることはなかったのである。

1960年代には女子の柔道人口も増え、ネットワークも広がり、非公式の組織づくりも進んでいた。ラスティはAAUにも働きかけたが、何の協力も得られなかった。彼女がいうところの“古い男たちの組織”であるAAUは、彼女たちがやっとのことで国内選手権の開催にこぎつけた時に、ようやく腰を上げたのであ

る。そして、1974年、はじめて公式に女子柔道選手権が開催された。今から10年ほど前のことである。

その後も、女子柔道界発展のためのラスティの努力は続いた。女子選手権のあとナショナルチームの結成と海外遠征をAAUに要請。様々な働きかけをして、1976年によく承認を得た。ナショナルチームが結成されると、今度はその資金ぐりに奔走した。あちこちの企業や団体と交渉したり、柔道ファン向けに商品販売などを行なった。そして遂に、その年、米国女子ナショナルチームは英国オープン出場にこぎつけたのである。

世界女子選手権のために孤軍奮闘

1976年の英国オープンがラスティにとって、いい意味で衝撃的な大会であった。というのも、彼女は自分と同じように闘う多くの女子選手を目にしたからである。そこには、20年間、彼女が歩んできた世界とは正反対の、まさに彼女の求める女子柔道の姿があった。彼女は自分と同じ志を持つ仲間が存在を知り、非常に勇気づけられた。そして、米国チームは8階級で、24個のメダル獲得という輝しい戦績で大会を終えたのである。

すばらしい成績にもかかわらず、その後の女子柔道界は問題を抱えていた。その後の英国オープンでは、徐々にヨーロッパ勢に押され、米国は後退していったのである。ラスティはこれを当然の結果として受け止めていた。なぜなら、寄り合い所帯的なナショナルチームの体質は、根本的に問題があると考えていたからである。1979年の英国オープンの後、彼女は『柔道マガジン』の中で、ナショナルチームとして年間を通した練習プログラムが必要だと指摘している。

1978年、女子スポーツ界にとって嬉しい法律が制定された。「アマチュアスポーツ法」と呼ばれるもの

でこれは特に女性スポーツの奨励と助成をうたったものであった。さらにこの法律は米国オリンピック委員会の体質を改善するものでもあった。しかし、法律が制定されたからといって、女子柔道家たちにとって状況は急には良くならなかった。AAU柔道委員会は、“古い男たち”の時代と大して変わりなかった。

一方、ラスティは1976年の英国での衝撃的な経験いらい、大きな夢を描き続けた。一時は全米大会への女子柔道の採用を働きかけた。が、これは失敗だった。そして、1980年のモスクワオリンピックに正式種目として認めさせることも試みたが、これもまだ時期尚早だった。しかし、彼女はその後も努力を続けていた。米国での世界選手権の開催をAAUに納得させ、国際柔道連盟に働きかけてそれを受け入れさせたのである。開催が決まると、委員会の組織づくりと大会開催準備の代表者として、彼女はほとんど1人で走りまわった。大会の資金づくりから審判のジャケットの用意に至るまで。

ラスティが柔道に憑かれて30年余り。第1回世界女子選手権開催という女子柔道の輝かしいエポックが彼女の業績だということは、誰の目にも明らかである。選手たちは注目を浴び、当時の大統領カーターが祝辞を送り、『スポーツイラストレイテッド』誌が記事を掲載した。

この30年間は、ラスティにとって男女差別をなくすための“闘いの30年”だった。スポーツが私たちに与えてくれるものには限りがない——彼女はこういう。人は、スポーツを通じて自分自身の才能を見出し、また、他人の才能を評価することができる。こうした貴重なチャンスを、ただ女性だからという理由で奪われるのはフェアでないと訴え続けている。

(WOMEN'S SPORTS

1983年3月号より抄訳=石塚由紀)



聖子の
軽験。

ジャガーΣテニス31

- 衝撃吸収性、耐摩耗性に優れた超軽量、特殊PUソールを採用
 - 天然皮革を上回る高級クラリーノF
- COLOR: ホワイト/ホワイト、ホワイト/シルバー、ホワイト/ネイビー、ホワイト/ピンク
SIZE: 28.0, 27.0 - 22.0cm

MOON STAR



超軽量195g!

JAGUAR Σテニス